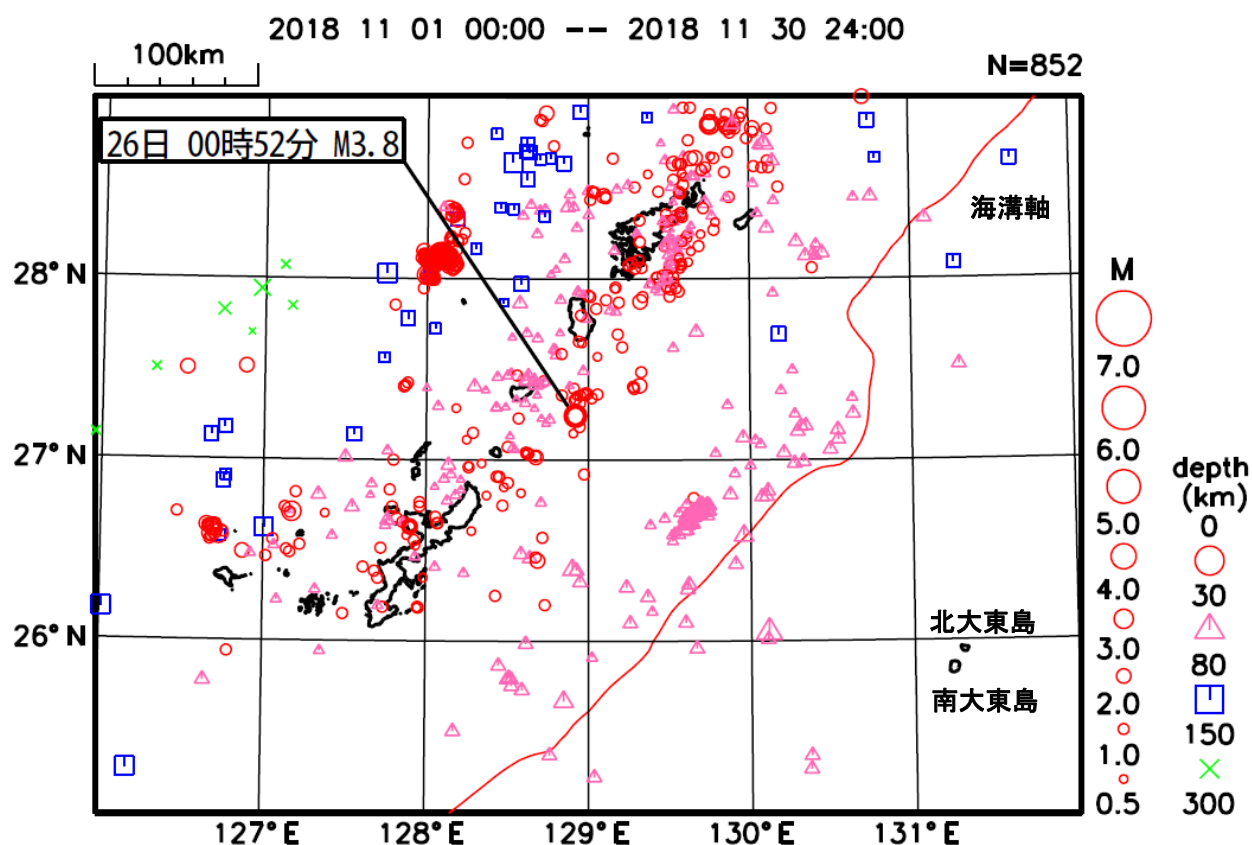


地震活動図

2018年（平成30年）11月

南大東島地方気象台

震央分布図



震度1以上を観測した地震を吹き出しで示しています。

図中の記号 M：マグニチュード depth：震源の深さ

N：地震回数（マグニチュード0.5以上の回数です）

[概況]

今期間に、大東島地方及び沖縄本島地方とその周辺（図の範囲内）で観測した地震は852回（10月2224回）で、このうちM4.0以上の地震は3回（10月7回）でした。なお、沖縄本島地方で震度1以上を観測した地震は1回（10月0回）、大東島地方で震度1以上を観測した地震はありませんでした（10月0回）。

26日00時52分に沖縄本島近海で発生した地震（M3.8、深さ23km）により、沖縄県国頭村、鹿児島県知名町で震度1を観測しました。

大東島地方、沖縄本島地方で震度1以上を観測した地震の表 (期間: 2018年11月1日~30日)

震源時 各地の震度	震央地名	緯度	経度	深さ	規模
2018年11月26日00時52分	沖縄本島近海	27° 14.6' N	128° 55.2' E	23km	M3.8
沖縄県	震度 1: 国頭村奥				
鹿児島県	震度 1: 知名町瀬利覚, 知名町知名*				

*の付いた地点は気象庁以外の震度観測点です。

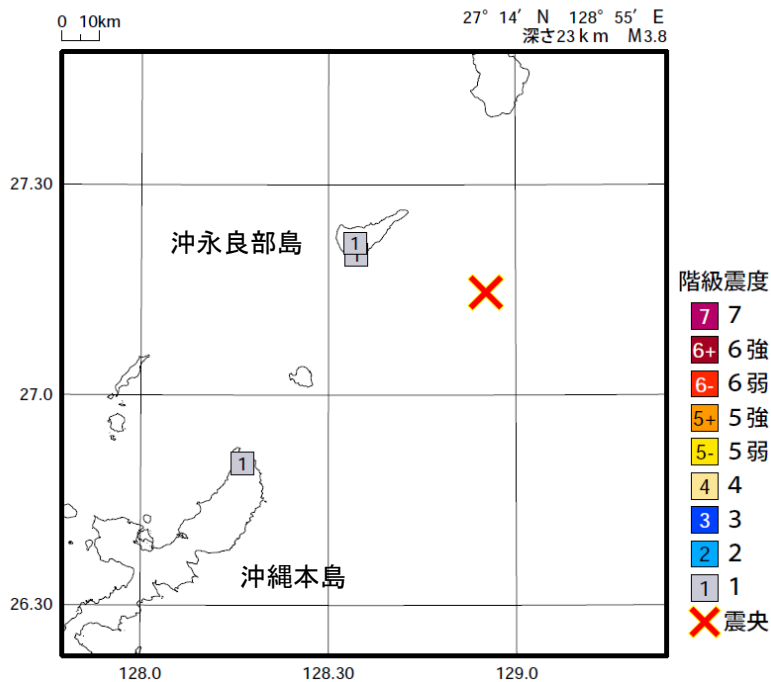
※ 資料中のデータについて

この資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。また、2016年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、米国大学間地震学研究連合（IRIS）の観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

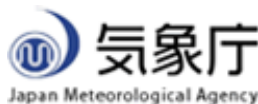
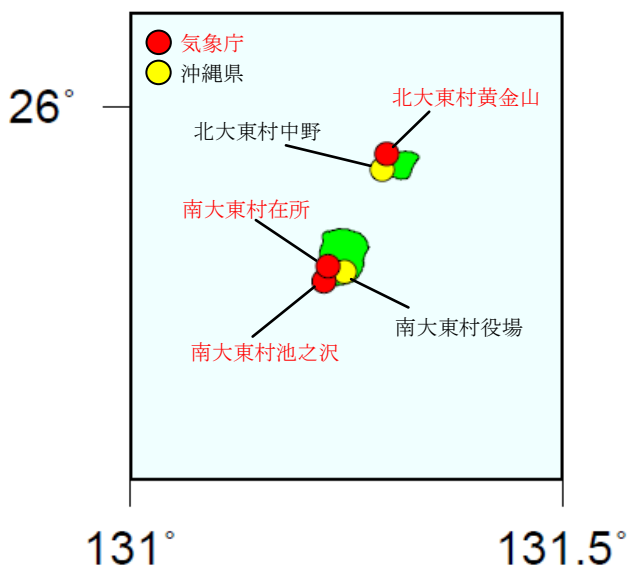
※ データについては精査により、後日修正することがあります。

大東島地方、沖縄本島地方で震度1以上を観測した地震の震度分布図

2018年11月26日00時52分 沖縄本島近海の地震の震度分布図



大東島地方の震度観測点



本件に関するお問い合わせ先

(南大東島地方気象台)

電話 09802-2-2006

<https://www.jma-net.go.jp/daitou/>

震度の豆知識

地震が起きた時、ニュースなどで「〇〇市で震度△」と流れますが、「昔はこんなに揺れた場所が多くなかった」とか、「昔はこの市の情報は出てなかった」などと思ったことはないでしょうか？

実は地震情報に用いる観測点の数も時代とともに大きく変わっています。

●震度観測点の歴史

日本における震度観測は、1884年（明治17年）に約600箇所の観測点で始まり、明治37年には気象官署や民間への委託をあわせ1437の観測所から震度データが収集されました。しかし昭和33年から、順次観測所の整理が行われ、昭和63年には全国158箇所の気象官署において震度観測が行われるのみとなりました。その後、防災対策での活用をより効果的に行うため、平成5年には震度観測点を約300箇所に、平成8年には約600箇所に増強しました。平成7年（1995年）兵庫県南部地震の経験により、地方公共団体が自らの初動防災対応の為に設置したデータを地震情報に活用することにより、震度観測点の数は大きく増え、より細かい地域での地震情報が出せるようになりました。

平成30年4月現在、全国で4372箇所、このうち沖縄県では84箇所の震度観測点のデータを気象庁の情報発表に活用しています。

●震度階級のうつり変わりと震度階級関連解説表

現在の震度階級は震度0～7の10階級（震度5・6は強と弱の2段階）ですが、これも時代とともに変わってきて現在に至っています。

明治17年に体感で「微震」「弱震」「強震」「烈震」の4階級を観測していたものが、明治31年より震度0～6までの7階級に、昭和24年には震度7を追加（ただし震度7は後日調査での判定とする）、平成8年4月にはこれまで体感だった震度観測を計測震度として機械観測化、震度7も震度速報に利用、同年10月に震度5と6に強弱を付けて現在の10階級になっています。

また、平成8年に、防災対策上有効な情報とするため、ある震度が観測された際に、実際にどのような現象、被害が発生するかをあらかじめ示しておく「気象庁震度階級関連解説表」を作成しました。その後時代とともに建築工学等が発展し、同じ木造やコンクリートの建物でも耐震性の高いものと低いものとで差がでるようになったため、平成21年3月に改訂しました。今後も定期的に内容が検討され、改訂される予定です。

気象庁震度階級関連解説表（震度5強：抜粋）	
人の感覚	大半の人が、物につかまらなさと歩くことが難しいなど、行動に支障を感じる。
屋内の状況	棚にある食器類や書棚の本で、落ちるものが増える。 テレビが台から落ちることがある。固定していない家具が倒れることがある。
屋外の状況	窓ガラスが割れて落ちることがある。補強されていないブロック塀が崩れることがある。 据付けが不十分な自動販売機が倒れることがある。自動車の運転が困難となり、停止する車もある。
耐震性が低い木造建物（住宅）	壁などにひび割れ・亀裂がみられることがある。
耐震性が高い木造建物（住宅）	—
耐震性が低い鉄筋コンクリート造建物	壁、梁（はり）、柱などの部材に、ひび割れ・亀裂が入ることがある。
耐震性が高い鉄筋コンクリート造建物	—



（出典）気象庁HP、震度に関する検討会 検討結果の概要
震度の活用と震度階級の変遷等に関する参考資料（平成21年3月）